



東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): 近代における日本・中国・インドの知識人交流と「アジア」認識

研究課題(英文): Intellectual Interactions and the Idea of 'Asia': Japan, China and India in Modern Times

申請者名・所属先: 井坂理穂・総合文化研究科

海外招聘者名: Claudia Derichs (Humboldt University Berlin)

1. 研究の目的

本研究は、近代における日本・中国・インドの知識人交流の事例を検討しながら、それらのなかでいかなる「アジア」認識が表されていたのかを探ることを目的として始められた。ここではさらに、ドイツで 2018 年から進行中の国際共同プロジェクト「アジアの形成(Shaping Asia)」とも連携しながら、アジアの異なる地域を研究対象とする研究者たちが意見交換をするための国際ワークショップやセミナーを組織し、多様なつながりのなかから立ち現れる「アジア」のあり方や概念を、分野・地域横断的に検討することが目指された。

2. 研究開始当初の背景

申請者は 2018 年より、ドイツのアジア研究者たちが中心となり、世界各地のアジア研究者たちをつなぐネットワーク構築を目指して開始された国際共同プロジェクト「アジアの形成」に関わってきた。このプロジェクトは、アジア諸地域間の接続性(Connectivity)、アジア諸地域間の比較(Comparison)、及び分野横断的なアジア研究者の協働(Collaboration)という「3つのC」を掲げて、「アジアの様々なダイナミクスを形づくる(あるいは形づくってきた)複雑なつながりを、通時的、共同的観点から、協働的に把握する」ことを目指すものである。申請者は同プロジェクトの代表者であるヨアンナ・プファフ＝チャルネツカ氏(ビーレフェルト大学)、及びプロジェクトの理論的枠組みの構築に大きな役割を果たしたクラウディア・デーリヒス氏(フンボルト大学ベルリン)らとともに、「アジアにおける知の創出と循環(Knowledge production and circulation)」をテーマに意見交換を継続していた。今回の公募研究プロジェクトにおいては、知の創出と循環に関して、申請者が「アジアの形成」プロジェクトでこれまでに関わってきた議論を踏まえながら、自らの事例研究を進展させるとともに、デーリヒス氏と共同で国際ワークショップやセミナーを組織し、この分野における議論をさらに発展させることを目指した。申請者自身の事例研究としては、コロナ禍の影響もあり度重なる変更を余儀なくされたが、結果的には以下の二つの方向に沿って進めることとなった。第一の方向は、申請者の専門地域である植民地期インド、とりわけインド西部グジャラート地方の出版物を通じて、そのなかに現れる日本や中国、アジアをめぐる言説・表象を検討するものである。第二の方向は、19 世紀終わりから 20 世紀初めにおける日本知識人たちのインドに関する言説・表象や知識人交流について、旅行記を手がかりに分析するものであった。当初の計画では、それらの事例と関連したかたちで現れる日印知識人と中国知識人たちとの交流をも視野に入れることを予定していたが、これについてはコロナ禍での移動制限や時間上の制約により十分に取り上げることができなかった。

3. 研究の方法

本研究は、申請者自身が行う史料分析に基づく事例研究と、申請者と共同研究者が協力して行う「アジアにおける知の創出と循環」に関わる研究交流や研究者ネットワークの構築とが関連するかたちで進められた。共同



研究者は、日本、東南アジア、中東を対象とした地域横断的な研究に長年携わり、「アジアの形成」プロジェクトの主要メンバーでもあるクラウディア・デーリヒス氏である。まず 2021 年初めに、東京大学南アジア研究センターその他の諸機関の協力を得ながら、国際ワークショップ「移動する知—つながり、フロンティア、翻訳(Knowledge on the Move: Connectivities, Frontiers, Translations)」(2021 年 1 月 9-10 日、オンライン)を企画・実施した。このワークショップには、報告者、ディスカッサント、司会として、日本、ドイツ、シンガポール、トルコから計 17 名が参加し、活発な議論を展開した。また、事前に学内の大学院生を対象とした報告者の公募を行い、3 名の大学院生が報告者に加わっている。ワークショップの成果の一部は、学術雑誌 *International Quarterly for Asian Studies* の特集号として刊行することを予定している。2021 年度後半には、ヒューマニティーズセンター主催のオープンセミナーにおいて、アジアにおける知の移動、翻訳をテーマに、デーリヒス氏と申請者が報告を行った(詳細については「5. 主な発表論文等」の〔その他〕を参照)。さらにこれらのセミナーには、「アジアの形成」プロジェクト代表者でネパール・インドを研究対象地域とする文化人類学者ヨアンナ・プファフ=チャルネツカ氏、現代イスラーム研究者の後藤絵美氏(東京外国語大学)、社会言語学・近代東アジア言語政策史を専門とする岩月純一氏(東京大学)、中国・日本思想史の分野から水野博太氏(東京大学)が報告者、ディスカッサントとして参加し、地域間の比較の視点からフロアも交えて活発な議論を展開した。デーリヒス氏の来日(当初は 2021 年初めに予定)は、コロナ禍の影響により延期を重ね、上記のワークショップやセミナーの企画や実施はすべてオンライン上で行われたが、ヒューマニティーズセンターのご助力によりプロジェクト期間を延長することで、2022 年 8-10 月に日本滞在中が実現した。滞在中は、申請者と共同で「移動する知」に関する雑誌特集号の編集にあたったほか、「アジアの形成」プロジェクトの趣旨や成果をまとめて日本語で刊行することを念頭に、定期的な意見交換を行った。一方、申請者自身の事例研究については、コロナ禍の影響で海外調査を延期せざるをえなかったことから、プロジェクト期間前半においては 19 世紀終わりから 20 世紀初めにおける日本知識人たちのインドに関する旅行記やガイドブック、日記などの収集・分析作業を進めた。インド西部グジャラート地方の出版物における日本や中国、アジアをめぐる言説・表象については、2022 年度後半から史料の収集・分析作業を集中的に行った。

4. 研究成果

主な成果としては以下の 2 点が挙げられる。第 1 点目として、申請者自身による近代の日印間での知の創出・循環に関わる事例研究が進展し、その一部が成果として刊行された。植民地期インドにおけるグジャラーティー語出版物にみる日本表象については、ヒューマニティーズセンターのブックレット 20『アジアにおける知の創出と循環—近代アジアにおける日本表象の事例から—』(井坂理穂・クラウディア・デーリヒス著、2023 年)の第 II 部に掲載した。ここでは 20 世紀初めのグジャラーティー語出版物における日本表象の事例について、どのような情報・知識・画像に基づき、どのような読者層に対して、いかなる目的のもとにこれらの表象が形づくられていったのかを詳細に検討しながら、それらが当時のインド知識人層における社会観、ジェンダー観や「近代化」をめぐる認識、「異国」理解のあり方と絡み合っていた様子を明らかにした。また、20 世紀前半にインドを訪れた日本の知識人たちの旅行記の分析に関しては、そのうちの食に関わる記述に焦点を当てた論稿が 'Travelling and Food in Colonial India: Experiences of Japanese Travellers in the Early Twentieth Century' (*International Journal of South Asian Studies*, vol.11, 2021 年)として刊行された。ここではこれらの知識人たちのインドにおける食の経験が、彼らのインド社会認識にどのように連関していたのかを論じている。

第 2 点目の成果としては、デーリヒス氏と共同で実施した国際ワークショップ、セミナーをもとにした研究成果の刊行、及び、これらの企画を契機とした国内のアジア研究者たちと「アジアの形成」プロジェクト・メンバーとの研



究交流の促進が挙げられる。研究成果の刊行に関しては、「アジアの形成」プロジェクトの趣旨や、上記のワークショップやセミナーその他で展開された議論をまとめるかたちで、「アジアの形成(Shaping Asia)プロジェクトの試み」と題する論稿をまとめ、前述のヒューマニティーズセンター・ブックレットの第 I 部に掲載した。この他、現在、刊行準備を進めている *International Quarterly for Asian Studies* 特集号においても、申請者と共同研究者との共著のかたちで、これまでの議論をまとめた序文が掲載される予定である。研究交流に関しては、若手研究者をはじめ、ワークショップやセミナーに参加した国内の研究者たちが、今後も「アジアの形成」プロジェクトの研究者ネットワークを活用していくことで、さらに幅広い研究交流へと発展していくことを期待している。

5. 主な発表論文等

〔図書〕

井坂理穂、クラウディア・デーリヒス『アジアにおける知の創出と循環—近代インドにおける日本表象の事例から』東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター、2023 年。

Derichs, Claudia. ‘Translating the Family’, in Erdmute Alber, David Warren Sabean, Simon Teuscher, and Tatjana Thelen (eds.), *The Politics of Making Kinship: Historical and Anthropological Perspectives*. New York: Berghahn Books, 2023.

Derichs, Claudia, Faiza Muhammad Din, and Manja Stephan–Emmrich. ‘Becoming Professionals: Virtual Mobility, Gender, and Religious Knowledge’, in Lina Knorr, Andrea Fleschenberg, Sumrin Kalia, and Claudia Derichs (eds.), *Local Responses to Global Challenges in Southeast Asia: A Transregional Studies Reader*. Singapore: World Scientific, 2023.

〔雑誌論文〕

Isaka, Riho. 2021. ‘Travelling and Food in Colonial India: Experiences of Japanese Travellers in the Early Twentieth Century’, *International Journal of South Asian Studies*, vol.11, 33–46.

〔学会発表〕

Isaka, Riho. ‘Travel Experiences and Knowledge Formation: Narratives of Japanese Travellers in Colonial India’. Knowledge on the Move: Connectivities, Frontiers, Translations. 東京大学南アジア研究センター(オンライン). 2021 年 1 月 9–10 日.

Isaka, Riho. ‘Knowledge Circulation and Travelling: Japanese Travellers’ Narratives of Food in Colonial India’. Revisiting the Situatedness of Knowledge: Sites of Knowledge in Asia. 2022 年 9 月 26 日. Shaping Asia(ハイフレックス). 26 September 2022.

Derichs, Claudia. ‘Languages and Concepts: Translating the Family’. Knowledge on the Move: Connectivities, Frontiers, Translations. 東京大学南アジア研究センター(オンライン). 2021 年 1 月 9–10 日.

〔その他〕

井坂理穂「近代インドからみることばと翻訳」ヒューマニティーズセンター・オープンセミナー第 48 回: ことばとことばの間—近代アジアにおけることばをめぐる模索—. 東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター(オンライン). 2021 年 12 月 10 日.



Derichs, Claudia. ‘Muslim Women in Asia: Virtual Mobility, Gender, and Religious Knowledge’. ヒューマニティーズセンター・オープンセミナー第 42 回: When Knowledge Moves with Humans: Travel, Mobility, and Media in Asia. 東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター(オンライン). 2021 年 9 月 17 日.

6. 招聘フェロー(海外招聘者)からのコメント

During my stay at The University of Tokyo from August to October 2022, I had the opportunity to work together with Professor Isaka Riho. We continued our collaboration which had initially taken off in the framework of the “Shaping Asia Network Initiative” (short: Shaping Asia). Shaping Asia is a network of researchers from Asian countries and from Germany; it is funded by the Deutsche Forschungsgemeinschaft (German Science Foundation). Prof. Isaka and I opted for hosting one topical current of this network, namely the one on knowledge circulation. We planned to organize three international workshops relating to this topic, but we had to reduce the number to one digital workshop because of mobility restrictions during the COVID-19 pandemic. The digital workshop in 2020, however, enabled us to gather a group of committed scholars who not only gave us valuable online presentations, but also agreed to have their contributions published in a special issue of the SCOPUS-listed journal “International Quarterly for Asian Studies” (IQAS). This special issue is forthcoming in late 2023. The workshop also formed a platform for Prof. Isaka’s and my subsequent research on how knowledge spreads through translation. How does knowledge “move”, and how does it spread within Asia? Prof. Isaka’s work on India/South Asia perfectly complemented my own work on Japan and Southeast Asia. We engaged in intensive discussions and made our studies available in various formats and publications. One of them is the HMC booklet 20 (see above). I cordially thank the HMC for this opportunity.